

『ミドルマーチ』に見る意味探求のプロセス

福永 信哲

The present paper focuses attention on the process of a search for meaning conducted by Dorothea the major protagonist in George Eliot's *Middlemarch* during her days of the honeymoon in Rome. The process of her growing awareness of Casaubon her husband's pathetic reality is seen to represent her emergence from narcissistic idealism into a higher vision of seeing things as they are and sympathizing with fallible fellow beings. First it is made clear that Dorothea's self-idealized sense of devotion in regard to her husband's dead letter erudition comes to be disillusioned by a poetic sensibility of her subsequent husband Will Ladislaw the romantic voice of George Eliot's own. Then we place the process of Dorothea's self-discovery in the light of the author's own spiritual autobiography. Lastly we bring into focus a stylistic analysis of the discourse depicting Dorothea's awakening. Thus we see how scientific imagination and the romantic vision of seeing into a whole organic unity behind the seeming miscellaneousness strike a subtle balance in the conception of Dorothea's drama.

Keywords : 意味解釈, 歴史主義的聖書批評, 実験科学, 生理学, ロマンティシズム

1 序論

『ミドルマーチ』(*Middlemarch*)の19章から22章に至るドロシア(Dorothea), カソーボン(Casaubon), ウイル・ラディスロー(Will Ladislaw)の三者三つどもえの濃密な人物描写は, 作家ジョージ・エリオット(George Eliot)が想像領域で行った, 言葉と人格の有機的相互依存のヴィジョンを複雑微妙なやり方で反映している。歴史の宝庫たるローマでのハネムーンという非日常的場面を背景に展開される三者のエピソード, 対話, 心理描写は, 個人の人間性が生きた生命体としての歴史によって生まれ, 制約され, 位置づけられる様を浮き彫りにしている。歴史の悠久のいとなみの中でこそ, 個人の人間性はその本来のありようが模索され, 発見されるのである。これらの章の中心軸は, ドロシアの, 自分探しの暗中模索にあるということができる。多情多感と知的好奇心を兼ね備えた彼女が結婚生活にかけた夢が, 伴侶たる孤高の老学者カソーボンの人間的な真実に触れ, 失望へと変化してゆく。このプロセスは, 彼女にとっては同時に, カソーボンの死後再婚するこ

とになるウイルの詩人的な感受性と鋭敏な歴史感覚によって, みずからの単一の視野が突き崩され, その価値基盤が揺らぐ崩壊の危機ともなる。

ドロシアのやみがたい知的好奇心と多情多感が地方社会の無理解で因習的な風土とぶつかり, 志の高さが心ならずも反抗の形をとり, 周囲から断罪される型は, メアリアン・エヴァンズ(Marian (Mary Ann) Evans) (George Eliotの実名)の歩んできた人生行路そのものである。その型が, マギー・タリヴァー(Maggie Tulliver), ロモラ(Romola)を経由し, ドロシアに至って, 作家の審美的・宗教的境地の到達点にまで磨かれ, 生きた人格に消化しきって表現されたのだ。ドロシアの辿った人生行路は相互依存のネットワークに位置づけられ, その人格は関係しあう結び目として描かれている。『ミドルマーチ』の「序曲」は, その意味で, 作家の自己との対話が長い熟考によって形を取ったものと見ることができる。そこに, みずからの過去を振り返り, 歴史的視野からこれを眺望しているような趣がある。キリスト教神話の聖テレサになぞらえられたドロシ

アの人間状況は、言葉の背後に無限の意味の奥行を湛えている。“Who that cares much to know the history of man, and how that mysterious mixture [man] behaves under the varying experiment of Time,” この一文には作品構想の理念が集約されていると言ってもよい。『ミドルマーチ』は、エリオットが実験科学の真理探究の方法を人物描写、文体的修辭はもとより、小説の構造そのものにまで生かしきった作品であると指摘される。¹「時の変化する（変異する）実験」のメタファーは、個人の時間感覚を超えて地球的な営みの視野から人間を捉えなおす含みをもっている。人間を「神秘の調合物の動き」と表現する言い回しにも、生理学の目で見た人間の営みを科学者が顕微鏡で観察する含みが感じられる。「序曲」の暗示的言い回しは、さらに続く。

... some object which would never justify weariness, which would reconcile self-despair with the rapturous consciousness of life beyond self.

... perhaps only a life mistakes, the offspring of a certain spiritual grandeur ill-matched with the meanness of opportunity;

これら簡潔曖昧な言い回しにも、ドロシアの経験の背後に作家の体験してきた境地が暗示されている。自己執着の囚われから、同胞の苦しみへの共感を通して心の自由を得るに至った道筋がそこにみえる。別な言い方をすれば、自己を超えた目標への邁進のなかに生の充足を模索してきた歩みがほのめかされている。また、その歩みは、因習的な観念に囚われた世間の無理解と己の弱さゆえに、多難なものであったことが底で響いている。

「序曲」が、主にドロシアの性格像を念頭に書かれたことは疑いを容れない。しかし、副題として「地方生活の研究」とあるように、この小説は、作家の立ち至った有機的生命体としての歴史観と、進化論を基盤とする生物学・生理学の見方の精華である。科学の方法と言葉を人間探求に生かそうとする壮大な意図は、一人物の内面描写にそっと忍ばせてある。個人と共同体の相互依存の動体力学を、その生成流転するプロセスのままに再現しようとする試みは、作品の言説を貫く原理として生きている。

... the imagination that reveals subtle actions inaccessible by any sort of lens, but tracked in that outer darkness through long pathways of necessary sequence by the inward light which is the

last refinement of Energy, capable of bathing even the ethereal atoms in its ideally illuminated space. . . . he [Lydgate] was enamoured of that arduous invention which is the very eye of research, provisionally framing its object and correcting it to more and more exactness of relation; he wanted to pierce the obscurity of those minute processes which prepare human misery and joy, those invisible thoroughfares which are the fist lurking-place of anguish, mania, and crime, (183-84)

これは、16章に見られる新参の医師リドゲート (Lydgate) の内省の一端である。科学者としての真理探究の方法を、人びとを癒すという職業的志の実現のために活用するのが彼の夢である。そこに、1820年から30年代にかけて黎明期を迎えていた自然科学の見方の精髓がほのめかされている。否むしろ、作家がこの作品を書いていた1860年代の、実験科学の一層洗練された知見さえほの見えている。自然界の現象を観察し、分析・総合することによって法則を明らかにする自然史の見方を乗り越えようとする問題意識が覗いている。真理の隠れ潜む闇の世界を、推論を基に仮説を立て、実験によって手探りするアプローチがそれである。仮説の暫定的な性質が実験の裏づけによって絶えず修正され、新たな真理が照らし出される果てしないプロセスが動的に捉えられている。探求者が読みによって「必然法則の働く道筋を模索する」試みは、対象をどこまでも広げ、森羅万象を光に照らし出さずにはおかない。人間が想像力の翼を広げ、飽くことを知らぬ知的好奇心を働かせる活動を「エネルギーの究極の洗練」とみる見方は、生理学の最先端の知見を反映している。この知的エネルギーは、いきおい人間の心の領域に向かわずにはおかない。やがてフロイトの「心の科学」へ通じる時代の動きがこの一節に見えている。

ピア (Beer) は、リドゲートの医学研究の方法に、エリオットが伴侶のジョージ・ヘンリー・ルイス (George Henry Lewes) (以下ルイス) と共有していた医学・生理学的アプローチが投影していると示唆している。彼女は、その意味合いを、科学的想像力、癒す人の想像力、小説家の想像力が調和して、その結晶が一人物に仮託され示唆されていると述べている。² そのリドゲートが、高い志にもかかわらず、人生の罫にいつかかるとも知れない危うい道德状況にあることを、語り手はこう述べる。“... for character too is a process and an unfolding.” (166) 関係の網の目の結び目としての人間、変化流動するものとしての人間、これこそが「時の流動する実験」で

その仮説が「必然的法則の連鎖」の眼で検証されるのである。本稿では、ローマでのドロシア、カソーボン、ウイルの係わり合いの中に、仮説が検証されるプロセスがプロットの形でいかに精妙に働いているかを、言語の実験という観点から辿ってゆきたい。

II 意味解釈の崩壊

『ミドルマーチ』には、一つの全体としての一貫した体系性が認められる。とりわけ、ドロシアとカソーボンのローマへのハネムーンを描いた19章から22章にかけては、語り、性格造型、叙景、対話に、作家が言葉の実験を行っていることをうかがわせる意味の奥行の豊かさがある。読者は繰り返し読むことによって、さりげなく、しかし周到に用意された神話と暗喩の意味あいを理解させられる。時代背景のなげない描写にも、人物の心のドラマに歴史的な視野と位置づけを与える配慮が生きているのである。

エリオットは、ドロシアのういういしい感受性が捉えた古代都市ローマの印象の感覚的真実を活写している。その「途方もない断片性は、新婚生活の夢のような不思議さをいやがうえにも高めた」(215)。³ 場のもつ強い感化力は、人のものを見る眼に働きかけ、触媒を促すのだ。

To those who have looked at Rome with the quickening power of a knowledge which breathes a growing soul into all historic shapes, and traces out the suppressed transitions which unite all contrasts, Rome may still be the spiritual centre and interpreter of the world. But let them conceive one more historical contrast: the gigantic broken revelations of that Imperial and Papal city thrust abruptly on the notion of a girl who had been brought up in English and Swiss Puritanism, fed on meagre Protestant histories and on art chiefly of the handscreen sort; a girl whose ardent nature turned all her small allowance of knowledge into principles, fusing her actions into their mould, and whose quick emotions gave the most abstract things the quality of a pleasure or a pain; (215)

古代異教世界の遺産を湛え、なおユダヤ教・キリスト教起源文明の中心地たるローマ、それは西洋世界の生き証人の都市といってよい。そこには古代、中世、近世、そして現代が雑然と同居している。もの言わぬ廃墟が遠いいにしえの人びとの生き様を偲ばせ、文明の興亡の跡が人の世の無常を悟らせてくれ

る。歴史の河の悠久の流れが、その断片的なシンボルによって、束の間を生きる人間の夢と理想のはかなさを語りかけてくる。人は、この悠然たる流れの河畔に身を置くと、己の小ささがしみじみ悟られ、自分を命の河に浮かぶうたかたとして振り返らずにはおられなくなる。これが、1860年、3ヶ月のイタリア旅行をルイスとともにし、とりわけローマを散策したときの感慨であったであろう。⁴ “the quickening power of a knowledge”という句は、作家が生ける全体性としての歴史から学んだ見方を暗示している。つまり、歴史は己の感受性で虚心に受けとめれば、学ぶ人間の行動の拠りどころとなるという道理を示唆している。ローマが見る人にとって「世界の解釈者」たるためには、曖昧にしか意味を表さないシンボルの断片をつなぎあわせ、類推として働くだけの質実な知識の資源を蓄え、そこから自分の生き様との関連性を発見することが欠かせない。

この一節には作家自身の体験的真実が底流に流れている。彼女の少女期から青春前期にかけて心酔していた福音主義 (Evangelicalism)⁵ 信仰の面影が行間に偲ばれる。多感な感傷が禁欲主義の形をとって溢れでるピューリタンの気質と行動パターンから、これを窺い知ることができる。“fed on meagre Protestant histories”という語り手の言い回しは、彼女自身が、後年の成熟した境地から己を回顧している含みを感じられる。熱烈な反世俗的信仰のさなかでも、抑えがたい知的探究心をくすぶらせていた自己矛盾と葛藤を偲ばせている。「序曲」に見えるように、感受性が鋭敏なばかりに、高貴な境地をあこがれて「間違いだらけ」の人生に陥り、周囲とのあつれきを招く型は作家の奥深い個性に由来している。ドロシアが作家自身の自己発見の模索を体現しているからこそ、その内面描写には汲めども尽きせぬ滋味深さがあるのである。

「深い印象に無防備な」ドロシアには、「謎を湛えたローマの重み」は、肉体の痛みにも似た痛切な体験であった。

Ruins and basilicas, palaces and colossi, set in the midst of a sordid present, where all that was living and warm-blooded seemed sunk in the deep degeneracy of a superstition divorced from reverence; . . . all this vast wreck of ambitious ideals, sensuous and spiritual, mixed confusedly with the signs of breathing forgetfulness and degradation, at first jarred her as with an electric shock, and then urged themselves on her with that ache belonging to a glut of confused ideas which check

the flow of emotion. (215-16)

ここには人物の視点と語り手の視点が同時に働いている。ドロシアの感受性が捉えた事実の衝撃は、“jarred her as with an electric shock”, “urged themselves on her with that ache”と表現されている。精神の受けた感化は、文字どおり肉体の物理的衝撃として感じられている。彼女の強い感情は、“all that was living and warm-blooded”, “flow of emotion”などの語句と相俟って、肉体の働きとしての感情に対する直感的理解の眼で見られている。ドロシアが結婚前に、結婚生活に馳せる夢を描いた内面描写にも同じ視点が見られる。“she did not want to deck herself with knowledge—to wear it loose from the nerves and blood that fed her action; (94) これは、肉の働きに対する直感を包摂した精神の理解を、作家が深く身につけていることを物語っている言い回しである。肉の営みと精神のそれを截然と分けることはできないのだ。

エリオットは、心身一如ということ、観念としてではなく皮膚感覚で知っている作家である。デカルト的な霊肉の二元論とパウロ的な霊の肉にたいする優越性は、ヴィクトリア朝の精神風土に深く根ざしている。これに対してエリオットは、医学・生理学の知見が新たに照らし出した真実を繊細に受けとめ、霊肉は一つの実在であるという認識を言語活動の基盤にすえていた。デーヴィス (Davis) は、作家のこの特徴を、伴侶ルイスとスピノザ (Spinoza) の影響と捉えて、こう述べている。⁶ 肉体の複雑で多様な可能性をスピノザは知りぬいていた。彼によれば、肉体は我々の世界認識に深い感化を及ぼしている。なぜなら、それは外界に対する繊細なアンテナとして独自の働きをもっているからである。肉はそれ独自のアイデアをもっているというのだ。この見方に立ってデーヴィスは、スピノザのこの直感的理解がエリオットの人間探求の靈感となったのである。上掲引用にみられる医学・生理学的洞察とその言葉の奥行を考えると、デーヴィスの見方は傾聴に値する。高みにたつて俯瞰する作家と、みずから正体の知れぬ感情のとりことなって手探りするドロシアの視野の落差がアイロニーを生み、ドロシアの置かれた状況を位置づけ、自己発見の方向性を指し示す所以になっているからである。

作家と人物の視点の違いが意味の奥行を与えていることを示すもう一つの理由は、この違いが現代と過去の対比に対する語り手と人物の認識のギャップを浮き彫りにするからである。ギリシャ語でソフォクレス (Sophocles) とアイスキュロス (Aeschylus)

の悲劇と『新約聖書』を読み、ラテン語でスピノザの『エチカ』(Ethics)を翻訳していた作家の、異教世界とユダヤ・キリスト教世界への造詣は、断片的シンボルにも意味の連鎖を読み解く洞察力として働くほどのものであったであろう。それだけの知的鍛錬を経たエリオットには、古代都市の巨大なテキストは、いかばかり彼女の歴史的想像力を掻きたてたことであろう。ドロシアの経験の浅い感受性に歴史の無秩序な渾沌がいかばかりの衝撃を与えたかを、練達の眼が見通しているのがこの一節である。過去幾多の人間の夢と志を情け容赦なく朽ち果てさせる無常の時の流れを前にしたとき、人は既成の観念と世界像を打ち碎かれる。“that toy-box history of the world adapted to young ladies”を捨て去り、これに替えて、“a binding theory which could bring her own life and doctrine into strict connexion with that amazing past, and give the remotest sources of knowledge some bearing on her actions (94) を渴仰するドロシアの真摯な情熱は、現実の歴史都市の謎の深さに圧倒されて、言葉を失ったのである。それは、真理を探究する人が経なければならないカタルフィである。この危機に直面しなければ、真の自分の言葉を再建することができないのだ。

結婚後6週間を経て、思い描く「未来」が現実の「未来」としてやってきたドロシアの失望感と心細さを、語り手はこう語る。“many souls in their young nudity are tumbled out among incongruities and left to ‘find their feet’ among them, while their elders go about their business.” (216) 未経験の無防備さは若さの宿命である。現実の不調和と渾沌の中から意味を模索する苦しみは、成熟に至る道を歩む人間の普遍的な体験だとみる見方がここにある。カソーボンとの身近な触れ合いの中から見えてくる彼の人間的現実への覚醒過程は、古代都市を背景に描かれている。これには無量の意味合いが隠されているとみてよい。一人の人間の背後には果てしない歴史の流れがあつて、その影響関係の結節点として個人の今があるからである。そういう流れと流れの合流が人と人との出会いである。出会いから始まって一步一步相手を知るプロセスに、作家は文学テキストを解釈する行為のアナロジーをみている。

Dorothea by this time had looked deep into the ungauged reservoir of Mr Casaubon's mind, seeing reflected there in vague labyrinthine extension every quality she herself brought; (26)

Miss Brooke [Dorothea] argued from words to dis-

positions not less unhesitatingly than other young ladies of her age. Signs are small measurable things, but interpretations are illimitable, and in girls of sweet, ardent nature, every sign is apt to conjure up wonder, hope, belief, vast as a sky, and coloured by a diffused thimbleful of matter in the shape of knowledge. (27)

これらの語りには、ドロシアのローマとの出会いとカタストロフィーを必然ならしめる人間的素地が暗示されている。活力ある強壯な肉体のエネルギーは多くを夢み、志す。カソーボンの生きた人格というテキストの解釈は、鋭敏で多感な感受性をもってしても一筋縄ではいかない代物である。その限られた知識は気質・体質のフィルターで濾過され、その染料で染められる。その色合いが道徳的価値に照らしていいとか悪いとかではなく、人間の現実認識の本質的不完全性が浮き彫りにされているのである。ここでも語り手のアイロニカルな視点は、人物の主観的視点に移動し、ものを想う未経験な感受性が限度を知らない解釈をする危うさをほのめかしている。

解釈する行為は、既知のものから未知のものを推測し、これを不断に位置づけていくということである。闇のなかで未知のものに宿す可能性にかけて、既知の領域を試行錯誤しつつ押しひろげることが生きる営為である。ミラー (Miller) は、人物が現実に関わりつつ、不完全な解釈を修正していくプロセスそのものの中に『ミドルマーチ』の中核的テーマをみて、指摘する。見ることは、エリオットにとって、中立的、客観的、受動的行為ではなく、欲望や欲求に動機づけられた利己的な中心軸から投げかけられた光の想像的投影である。また、この放射状の光は、見る人の先入主に従って、視野に入ったものを秩序づけると見ている。⁷ この観点に立つと、ドロシアがローマの歴史の残骸を前にして感じた方向感覚の喪失と解釈の破綻は、自分の思いを先に立ててもものを見る発想の行き詰まりを意味している。己の志と義務感が喜びと感ぜられず、名状しがたい閉塞感と抑圧感が楽しかるべきハネムーンに暗い影を射す。この内的風景の荒涼と、さもしい現代の只中に過去の遺骸が乱立する外的風景の無秩序は、底で通じあっていることが知れる。彼女が、カソーボンとの日常的触れあいに直感する暖かい血の触れ合いの欠落感、すべてが言葉と観念になりさかっているさまは、世々代々の人間の情念を呑みこんで、これを情け容赦なく遺物と因習に変えてしまう時の無常と二重写しになる。“all that was living and warm-blooded seemed sunk in the deep degeneracy

of a superstition divorced from reverence.” 行間に湛えられた惰性的因習遵守と生の衝動の乖離の痛ましさは、裏で意味の再建の方向性を暗示している。言葉が本来の意味を生き生きと通わせる霊肉の調和と生の充足への胎動は、失望のなかにきざしているのである。

III 意味再構築への道

ドロシアの意味解釈のカタストロフィーに再建の契機を読み取る批評家もいる。ハーツ (Hertz) は、彼女の喪失体験のなかに、世界観の解体から再建に向かうモーメントとしての崇高体験 (an experience of the sublime) を認めている。彼は、この体験の意味合いを、カント (Kant) の言葉を借りて言う。一つの全体性を直感しつつ、これを言葉にしようとしてできないもどかしさ、おのれの想像力の限界を痛切に自覚させられる瞬間がドロシアの体験の本質であると。さらにワーズワース (Wordsworth) の“Tintern Abbey”⁸ の言葉を借りて言う。意味不明の世界を前にして、その重みに堪えかねて、魂が堰を切るようにものごとの命を直覚する瞬間がドロシアに訪れたのだと。この崇高なるもののリズムを衝撃として体感すると、体験者のうちで何かが変わり、それが種となって果実を結ぶことを読者は予感させられるという。⁹ ドロシアのカタストロフィーの体験にロマンティズムの崇高体験をみるハーツの直感には、その後の彼女の意味探求の歩みを想起するとき、深い示唆を与えてくれる。この崇高体験が、おそらくエリオット自身のものであったことも察するに難くない。それほどにこの一節には、言葉の背後に体得された意味の奥行が広がっている。それは、歴史を変化流動する生きた全体とみる直感的理解が捉えたものである。これによって、ドロシアの夢み大望する理想主義は限界を悟り、過去の人物や出来事を、あたかもおのれ自身の血肉の通った営為であるかのように理解する眼が開けてきたのだ。これが彼女には、気質的な自己欺瞞を突き抜け、自己を超えた神秘の世界の前におのれをさながらに投げ出す契機となってゆく。

生ける全体性の働きをほやっと直感しながらこれを言葉にできず、心の衝撃をそのまま抱えこみ、内に堪えているドロシアの心事を、語り手はあるイメージによってその神秘的奥行を暗示している。

The element of tragedy which lies in the very fact of frequency, has not yet wrought itself into the coarse emotion of mankind; and perhaps our frames could hardly bear much of it. If we had a

keen vision and feeling of all ordinary human life, it would be like hearing the grass grow and the squirrel's heart beat, and we should die of that roar which lies on the other side of silence. As it is, the quickest of us walk about wadded with stupidity. (216-17)

結婚という新しい現実が引き起こすえも言いがたい閉塞感と心細さは、ドロシア自身にはその正体が掴めない。このような五里霧中の心境を暗示的にほめかす語り手の言語感覚には、命の神秘を透視する炯眼が働いている。ドロシアの鋭敏な感受性が予感した将来への不安は、誰もが体験するような種類のものである。しかし、平凡な状況を一步掘り下げると、そこに悲劇性が孕まれている。それは同時に、人を崇高な境地に引き上げる契機でもある。凡庸な営みの中にも神秘の闇が広がっているからである。人間が感覚的に捉えうるものは、たまたま自らの感知可能な領域のみであって、その背後には宇宙的な広がりから極微の命の営みに及ぶ壮大な生命のドラマがある。それは、束の間の命を生み出し、召し上げる働きそのものに由来する。19世紀の時代精神は、科学の理知の光によって、人間の命の営みを眺める視座の根本的転換を迫られた。視点を少し転じてみると、草が伸びる動きとリスの心臓の拍動の、人間には沈黙と感じられる極微の営みが轟音となる世界が広がっている。¹⁰ 命の神秘の悠久の営みに前にすると、人間は言葉を失う。これに照らしてこそ、私たちは自分の短い人生を位置づけ、意味を見出すことができる。おのれの命は大きな世界から賜ったものであるという根本的事実が、私たちに命への敬意を教えてくれる。これを科学の仮説・検証の方法で捉えようと、ロマンティズムの全身全霊の直感的把握によろうと、生ける有機的全体に対する敬意の心は一つのものである。

上掲の一節にドロシアの心境を示す言葉は見られないが、語り手の、意味を探る眼が、読者にドロシアの予感した体験の本質を想像させてくれる。それが、意味の解体と再建を同時に孕むワーズワース的な崇高体験であることを。ウィリー (Willey) は、ワーズワースの *Excursion* 批評の中で、詩人が想像力と呼ぶものを、次のように解説する。想像力とは、精神が最高度の洞察と注意力を獲得した状態である。想像力の活動は成長する活動であり、私たちがとかく陥りやすい陳腐化の殻を打ち壊し、この硬い素材を生きた新しい全体へと鑄直すところにその働きが表れると。¹¹ 想像力をこの観点で見ると、ドロシアの体験したカタストロフィーは創造的気づ

きの兆しであり、陳腐化した知識を捨てることによって、ものをあるがままに見る基盤を獲得したといえる。

歴史都市が湛える過去の表象が、ドロシアとカソボンとの感受性の対照を浮き彫りにするさまには、感情の闇の曖昧領域に分け入って、言葉を手探りする語り手の想像力が躍如としている。ラファエルの壁画などの意味を解説してゆく夫の、「典礼執行規定」を読み上げる牧師のような情味のない調子は、これに耳を傾ける妻には、言葉の背後に共感がこもっているとは感じられない。言葉が喚起する感動と思考が彼女に働きかけ、これによって世界が喜びと驚きに満ちたものになる、そういう命のほとぼしりが無いのである。

... if he would have held her hands between his and listened with the delight of tenderness and understanding to all the histories which made up her experience, and would have given her the same sort of intimacy in return, so that the past life of each could have included in their mutual knowledge and affection — or if she could have fed her affection with those childlike caresses which are the bent of every sweet woman, who has begun by showering kisses on the hard pate of her bald doll, creating a happy soul within that woodenness from the wealth of her own love. That was Dorothea's bent. With all her yearning to know what was afar from her and to be widely benignant, she had ardour enough for what was near, to have kissed Mr Casaubon's coat-sleeve, or to have caressed his shoe-latchet, if he would have made any other sign of acceptance than pronouncing her, with his unfailing propriety, to be of a most affectionate and truly feminine nature, indicating at the same time by politely reaching a chair for her that he regarded these manifestations as rather crude and startling. (221)

ここでも語り手は、ドロシアの感受性の視点から夫婦の感情の機微を手探りしている。己を空しくして人物の心と心のやりとりに聞き入る趣が感じられる。息の長い仮定法の畳みかけは、語り手がドロシアの感情の動きにときに参入し、ときに離れてみるために、文脈の要請に従った自然な結果であろう。この仮定法が事実と想像の融通無碍な対話を可能にして、作家と人物の間に流れる味わい深いアイロニーを湛えている。ここに、作家がみずから課した

芸術的課題たる “the severe effort of trying to make certain ideas thoroughly incarnate, as if they had revealed themselves to me first in the flesh and not in the spirit”¹² が行間に生きていることが知られる。エリオットがこれらの言葉に託した意味はいは、単にアイデアを、生きた、血の通った人格に消化して描くという小説家としてのヴィジョンばかりではない。感情と言葉は肉に制約され、肉に導かれるという道理をも意味している。言い換えれば、人間の肉体、思考、感情、言葉は一つの有機的生命体の違った表現なのである。これは、彼女が、遅くとも29歳までには自己のものとし、¹³ スピノザの直感にその正当性を裏づけられた見方である。スピノザは言う。肉体のしくみは、人間の技が作りあげたいかなる作品よりもはるかに精巧なのだ。なぜなら、人の肉体もその一部である自然から無限のものごとが流れ出してくるからである。さらに続けていう。私たちは自分の行為を自覚できても、その原因は知らない。おのれの精神が決定していると思込んでいることは、往々にして肉の申し子たる欲求の産物なのだ。¹⁴ 自己の肉なる存在の要求に聞き従いつつ、理知の光に照らしてその働きを善導するところに、スピノザは良識の声を聞く。この声は、罪なる肉の要求を克己によって克服しようとする精神主義とは本質的に異なるものである。ここにエリオットは、自分と琴瑟相和す魂を見出したのである。

夫と妻の一見穏やかな言葉としぐさのやりとりのなかに、底知れない感情の乱気流を描き出す作家の筆使いは、読者の行間を読む想像力を刺激して、注意をそらすことがない。それが端的に表れるのが、カソーボンの著書出版をめぐるやりとりである。夫の生涯の目標たるこの事業に向けて、自分に何ができるかと真摯に問いかけるドロシアの訴えに、なぜだか嗚咽が混じり、眼には涙があった。奉仕したいという純な思いが潮のごとくほとばしったのだ。ところが、この強い感情が夫の傷つきやすい感受性をいたく刺激した。彼の心には、著書出版が鉛のごとく重荷となつてのしかかり、これをめぐって自己不信が密やかにくぐもっていたからである。触れればずきずきと痛む傷口のことを知らないドロシアの、あふれ出んばかりの感情が相手の癩にさわるさまを、語り手はこう語る。

She was as blind to his inward troubles as he to hers: she had not yet learned those hidden conflicts in her husband which claim our pity. She had not listened patiently to his heart-beats, but only felt that her own was beating violently. In Mr

Casaubon's ear, Dorothea's voice gave loud emphatic iteration to those muffled suggestions of consciousness... (223)

ここにも、肉体、感情、言葉を一つの全体としてみる作家の中核的ヴィジョンが見えている。人は他者の言葉をあたかも白紙に書き移すように聞いているのではなく、体験と記憶の生きた媒体を通して聞くのだ。そこに自己中心性の色調が混ざることとは不可避なのである。言葉は、語る人の声という共鳴版の響きを伝えずにはおかない。感情の動きを心臓の鼓動として表現するのは、比喩としてのみではない。感情が肉体の生理的な営みの一部だということも暗示しているのである。¹⁵ 感情のやみくもなエネルギーは、他者の存在を察知する知覚を曇らせもする。閉じこめられ、交流を知らない感情のたまり水は我執の汚水溜ともなる。世間を恐れ、ひるむカソーボンの不安なエゴイズムは、妻の善意の言葉に自分の病的自負心のささやきを聞くのだ。

It [Casaubon's inner musing] was not indeed entirely an improvisation, but had taken shape in inward colloquy, and rushed out like the round grains from a fruit when sudden heat cracks it. Dorothea was not only his wife: she was a personification of that shallow world which surrounds the ill-appreciated or desponding author. (224)

猜疑心は、現実との接点を失うと、おのれ自身を糧にして自己増殖する。“shallow”, “ill-appreciated” のような価値判断を示す言葉は、語り手のアイロニカルな距離感によって、カソーボンの感傷的な自己弁護を暗示している。長年胸の奥に溜めこんだ不平不満が思わず知らずほとばしりてた言葉を、語り手は比喩に託して語る。木の実の殻が割れて、そこから種があらわになるイメージは、言葉が肉の産物であるという作家の洞察をほのめかしている。感情それ自体によい悪いはない。霊肉が他者との生きた交流を失うと、否定的感情が圧倒する反面、相互に理解され、分かちあわれると、ものがしみじみと肯定される、その道理があるのみである。

このエピソードに見られるように、カソーボンの自己執着の描写には、生きた水の流れがせき止められ、たまり水となったイメージが一貫している。人間が自然に背を向けると自我が病み、あらゆる人間的美質が転落することを見通した作家の直感が、否定的な形でこの人物に反映している。これは、ドイツ高等批評、なかんずくフォイエルバッハ

(Feuerbach) の自然を敬う心¹⁶へ深い共感を寄せていたエリオットの間人観に基づいた描写なのである。

ドロシアとカソーボンの自我と自我のせめぎあいの中にエリオット自身の一面が色濃く反映していることは、大方の批評家の指摘するところである。その見方を代表するのがエルマン (Ellmann) である。彼によれば、カソーボン描写は、作家自身の執拗な自己不信を暗示しているという。思春期の性愛の葛藤は、彼女の信奉した福音主義によって助長された面があるのだが、あとあとまで思い出すのも辛い体験であった。カソーボンのエロスの抑圧ないしは枯渇は、作家自身が思い悩んだ不毛な空想の表象であって、それゆえにこそ、これだけの迫真的な描写が可能になった。カソーボンの自我の仮借ない解剖は、従って、作家自身のエロスにまつわる自己抑圧を表現行為によって相対化し、解き放す意味合いがあると。¹⁷ 少女時代以後、少なからぬ恋愛体験を重ね、性愛の体験も人後に落ちなかった¹⁸ メアリアンの人生を振り返ってみると、エルマンの見方には一面の真実があるように思われる。宗教的ドグマが命の充足を阻むからくりを自らの体験で知り抜いているからこそ、肉の要求にほどよく聞き従い、これを知性の光によって交通整理をしてゆくスピノザの諦念に共感を寄せたことが偲ばれる。エロスが人間の幸せにたいしてもつ無量の意味合いを、作家は否定的な形で、ドロシアの二人の夫たるカソーボンとウイルの対照に託したと言える。

エルマンの解釈が推測の域を出ないことは否定できないが、にもかかわらず、我々をうなずかせる力がある。それは、ドロシアの眼からみたカソーボンとウイルの感受性の違いに、作家が注意深い焦点を当てていることからもうかがえる。ウイルを夫の留守中にホテルの自室に受け入れたドロシアの心中を、語り手はこう表現する。“Yet it was a source of greater freedom to her that Will was there; his young equality was agreeable, and also perhaps his openness to correction. (233) ドロシアに気兼ねのない深呼吸を許す彼の大らかな感化があつてこそ、カソーボンとの隠微な暗闘で明らかになった彼の根本的人間性が振り返られるのだ。夫との緊張関係は、彼女のなかで “epochs in our experience when some dear expectation dies, or some new motive is born” (235) と感じられた。それは、彼女には、“the waking of a presentiment that there might be a sad consciousness in his life which made as great a need on his side as on her own” (235) と表現される気づ

きの予感であった。

ドロシアの心をよぎる一瞬の予感の意味するところを、語り手の遠近法は意味探求のテーマに位置づけて語る。

We are all of us born in moral stupidity, taking the world as an udder to feed our supreme selves: Dorothea had early begun to emerge from that stupidity, but yet it had been easier to her to imagine how she would devote herself to Mr Casaubon, and become wise and strong in his strength and wisdom, than to conceive with that distinctness which is no longer reflection but feeling—an idea wrought back to the directness of sense, like the solidity of objects—that he had an equivalent centre of self, whence the lights and shadows must always fall with a certain difference. (235)

エリオットのおびただしい手紙と日記をほんの一部でもひもといたことがある人なら、彼女が若いときと晩年とを問わず、いかに自分の迷いの深さを自覚していたかが知れる。¹⁹ 小説家として功なり名遂げた作家のこの率直さには何か心を打つものがある。自我の迷妄を凝視する作家の凄絶なまでの力は、それが彼女自身の人間的眞実から出たものであることを物語っている。心の闇が深いからこそ、光を仰ぎ、魂の平安を祈る思いが深いのだ。この一節に見える作家のヴィジョンは、迷いの淵から光明を仰ぐ祈りに他ならない。語り手の想像的な言語感覚は、自我の利己的本性を物理的イメージで喝破している。“an udder to feed” の喩えに見える自然の養い、育む力の連想は、“supreme” という語の皮肉なまなざしと相俟って、人の自己愛が、善悪の観念を超えた本来の現実であることを暗示している。私たちが人と人とのかわりあいという原型的な体験をするとき、見かけと実態の落差に惑わされるのも、この抜きがたいナルシズムに由来する。ドロシアの半生を俯瞰する語り手の眼は、他者との邂逅と触れ合いの深まりを最も生命的な体験として見通している。語り手の焦点が絞られてゆくプロセスは、そのままドロシアの体験の深化のプロセスとして描かれている。学問の先達に導かれておのれの世界を広げようと夢みる魂は、未経験の見る遠景である。ところが、うるわしい景色も近づいてゆけばゆくほど、ごつごつとした岩肌が見えてくる。相手の人格の現実をおのれの情熱の雲間からかいま見ると、幻滅と理解が相接して訪れる。ものがあるがままに見るとい

うことは、複雑で奥深い行為なのである。だからこそ、これが真の道徳性を獲得する必須の基盤となる。

ハーツは、この一節に、エリオットの道徳的想像力の精華をみている。自己執着の根深さを示す鮮やかなイメージは、いやがうえにも読者の自己省察を誘うという。この迫真性は、作家の創作ヴィジョンに由来するというのだ。彼は、これを裏づけるために、エリオットのエッセーを引用している。

... a picture of human life such as a great artist can give, surprises even the trivial and the selfish into that attention to what is apart from themselves, which may be called the raw material of moral sentiment. (263)²⁰

凡庸で利己的な読者にも思わず知らずおのれを振り返らせる力は、その心を揺さぶって他者の意識へと目覚めさせる言葉の力である。この力は、読む者の自己中心的な声が揺さぶられて抵抗するからこそ、よけいに強く働く、とハーツはいう。こう読み解いたうえで、人間心理の逆説を次のように指摘する。道徳的暗愚に生まれつくということは、想像力豊かに生まれつくということである。想像力の働きが孤立的固定的なイメージに囚われ、他者との交流を断たれると、ものに固執する。想像力のこの惰性的な働きに抗してこそ、道徳的想像力本来の働きは発揮される。自我が閉所に閉じこもると、ナルシズムに陥るが、外に向かって働きかけると真の道徳性を獲得する糧となる。ところが、想像力のこの二律背反的な働きの境目は本質的に曖昧だ、というのがエリオットの直感であるという。²¹ ハーツのこの解釈は、エリオットが、明晰な言葉へと磨き上げてはいないが、ぼんやりと気づいていた直感的認識を射貫いている。個人の肉体、感情、言葉の間には生命的な相互依存が働いている。他者との関係のなかで営まれるこの曖昧領域を曖昧なままに描くのが、作家の小説作法の核心にあった。肉体には精神の知らない領域があるとみるスピノザの直感は、エリオットの皮膚感覚にまで磨き上げられた人間の見方である。その人間凝視のまなざしは、道徳的善悪の相対性を明敏に見通していた。これも、作家が歴史主義的聖書批評から学んだ人間理解の一側面である。

IV まとめに代えて 歴史の意味あい

では、想像力の相矛盾する二面性はいかにして解消されるのであろうか。他者理解と共感の働きを高め、自己執着を乗り越えることは、いかにして可能になるのであろうか。エリオットは21章末の、上掲

の一節に続く章で、この問題への糸口を模索している。ウイルの局外者の視点が、ドロシアとカソーボンの暗中模索を推察し、ドロシアの苦痛に満ちた気づきに、広い視野からその意味するところを位置づけている。

To be a poet is to have a soul so quick to discern that no shade of quality escapes it, and so quick to feel, that discernment is but a hand playing with finely-ordered variety on the chords of emotion — a soul in which knowledge passes instantaneously into feeling, and feeling flashes back as a new organ of knowledge. (249)

名状しがたい自己抑圧感を抱えこむドロシアには、語りかけてくるウイルの言葉は、一語一語含みをもって心の琴線に触れてくる。言葉が相手を思う気持ちから素直にほとばしってくるからである。相手の感情を読むことは、命のやりとりである。相手の感情の弦に指先が触れ、「絶妙に調和のとれた多彩な調べ」を紡ぎだすこと、これが言葉を使って魂と魂が触れあう心である。「感情の弦」のメタファーはものの喩えという以上の含みを湛えている。感情は霊肉の有機的な営みの一環である。肉を離れて感情も言葉もない。相手との生きた交流を離れて、感情も言葉も自己充足を知るすべはないのである。感情と言葉と理知が一つ潮になって合流し、あい照らしあう、この有機的統合原理としての詩の境地は、エリオット自身のものである。これは、彼女がロマン派詩人の感受性を自家葉籠中のものとしていたことを物語る証左である。

ウイリーは、コールリッジ (Coleridge) の「悟性」(Understanding) と「理性」(Reason) の違いを解説して言う。「悟性」は心情と頭が分裂し、単なる思弁の能力に転落したものである。これは、分析し、抽象することはできるが、そうやって分類した部分を一つ全体に統合することができない。「理性」の働きとは、頭と心情、光と温かみがあい協力して働くことであると。²² 上掲の引用に見えるように、知識が感情の闇流を照らし、これに呼応して感情が知識の新しい「器官」として働くという生理学的な発想は、コールリッジが「理性」にこめた意味と違うことを言っているのではない。誤解を恐れずに言えば、科学的ロマンティズムともいふべき作家自身のヴィジョンが、ウイルの言葉に反映していると考えてもよい。

作家自身の創作上のヴィジョンがしばしばウイルの言葉に託されていることは、彼の体現する感受性

が、ドロシアの理想主義の行き詰まりを打開する導きの光として機能するように構想されているからにほかならない。同じ21章でドロシアとの対話のなかで語られるウイルの歴史観にも、同じ役割がこめられていることが察せられる。

... the enjoyment he [Will] got out of the very miscellaneousness of Rome, which made the mind flexible with constant comparison, and saved you from seeing the world's ages as a set of box-like partitions without vital connexion. ... Rome had given him [Will] quite a new sense of history as a whole: the fragments stimulated his imagination and made him constructive. (236)

これらの言葉に、歴史の都市ローマでドロシアの現実への目覚めが起こったことの意味あい暗示されている。人の心のドラマの背後には、記憶を絶するような歴史の流れがある。流れのなかの一瞬に現代があるのである。歴史が私たちにとって、知恵の光となって生きるためには、雑多な断片的シンボルに意味を読み取る想像力の働きが欠かせない。もの言わぬ断片に意味を読みとる心の目が働いてこそ、過去の知識に血肉が通ってくる。その働きは、人の奥深い人間性のありようを、一見脈絡がないように見えるそぶりや表情や言葉の調子から読みとって、相互理解へと実らせる行為とアナロジーがある。生きることは不断の意味解釈を積み重ねることである。意味を読み解くためには、それゆえ、視点をいにしえの遠景から現代の近景に移動して、行きつ戻りつ、あらゆる角度から眺めることが要請される。歴史は、これによって私たちを導く道しるべとなる。

カロール (Carroll) は、「意味解釈」という行為を、文学テキストや芸術の「意味解釈」という文脈に限定せず、より広い意味で生きる意味の探求と捉えている。彼の言い方を借りれば、闇を照らし出し、光の領域を押し広げる営みそのものが生きるということだということである。そのような意味の意味解釈は、エリオットの人生の宿命であったという。早くから正統派キリスト教の教義を捨てた彼女は、絶えず「解釈の危機」に立っていた。慣習的社会からあてがわれた「正統的」意味の基盤を失って、光と闇のせめぎ合う瀬戸際の領域を手探りしたのが彼女の人生だったという。知識と無知は相接しており、その危ういバランスが崩れると仮説が教条になり、一貫性のある意味が断片化する。この曖昧領域を手探りするプロセスを近道しようとする、私たちの世界理解はせいぜい部分的なものにとどまる。知識と無

知の不安定な隙間を埋めることが生きることであり、語りを可能にするという。²³ 以上のカロールの見方には、エリオットの意味探求の営みを人生の実験と見立て、これがそのまま彼女の小説のプロットと言説になったという認識が暗示されている。これは、作家の人生と作品との有機的関係を鋭く見通した卓見である。『ミドルマーチ』20章から22章に至る、ドロシアの、生きる意味の探求は、エリオット自身の宗教的人道主義 (Religion of Humanity) の最も精緻な表現といってよい。そのプロセスを吟味してみると、作家自身の体験した歴史主義的聖書批評の世界観と真理探究の方法が、芸術的ヴィジョンとなって生きていることが知れる。

注

- 1 Beer は、*Middlemarch* に至ってプロットの性質に本質的な変化が起き、それが因果の連鎖によって説明されるべき仮説となったと述べている。*Darwin's Plots* (151) 参照。Shuttleworth は、中期までの小説とは区別して、後期 2 作品 (*Middlemarch*, *Daniel Deronda*) で、*Middlemarch* 15, 16 章のリドゲート描写に集約されている科学的対象把握の方法が、この作品全体に生きている実験生物学のアプローチであることを指摘している。*George Eliot and Nineteenth-Century Science* (143) 参照。(注のみ著者名と作品名は原語で示す)
- 2 *Darwin's Plots* (154) 参照。
- 3 *Middlemarch* からの引用の翻訳は筆者の拙訳である。
- 4 Ashton は、作家自身のイタリア紀行の体験がドロシアのローマへのハネムーン旅行に反映しているとみている。*George Eliot: A Life* (241) 参照。
- 5 一般に、キリストの十字架による罪の赦しの福音を中心とし、伝承と祭儀のかわりに敬虔な心情と実践とを重んじる運動・考え方。『広辞苑』第5版参照。
- 6 Davis (18-9) 参照。
- 7 Miller "Optic and Semiotic" (105) 参照。
- 8 "Lines Written a Few Miles above Tintern Abbey" (I 37-42) Anstey 参照。
- 9 Hertz "Recognizing Casaubon" (35-6) 参照
- 10 この引用は、Thomas Huxley の "The Physical Basis of Life" の、以下の一節に着想を得たことが指摘されている。"The wonderful noonday silence of a tropical forest is, after all, due only to the dullness of our hearing; and could our ears catch the murmur of those tiny Maelstroms, as

- they whirl in the innumerable myriads of living cells which constitute each tree, we should be stunned, as with the roar of a great city." *Oxford Anthology of English Literature* Vol. II (1061) Beer *Darwin's Plots* (142) 参照。
- 11 Willey (16) 参照。
- 12 Cross (ed.) *George Eliot's Life as Related in Her Letters and Journals* (401-02) 参照。
- 13 Marian は、父親を看取った29歳より以前から Spinoza の『神学政治論』(*Tractatus Theologico-politicus*) を翻訳し始めていた。Ashton *George Eliot: A Life* (71) 参照。
- 14 *Ethics* (87) 参照。
- 15 Davis は、Eliot の感情描写に生理学用語が多用される傾向に触れ、これが心と肉体を一元的にみる Spinoza と Lewes の影響によることを指摘している。*George Eliot and Nineteenth-Century Psychology* (18) 参照。
- 16 Feuerbach は、キリスト教の洗礼の起源を分析する一節で、水のシンボリズムについて言う。"In the stream of water the fever of selfishness is allayed. Water is the readiest means of making friends with Nature. The bath is a sort of chemical process, in which our individuality is resolved into the objective life of Nature." *The Essence of Christianity* (275-76) 参照。
- 17 "Dorothea's Husbands" *Modern Critical Views George Eliot* Bloom (73) 参照。
- 18 Haight は、Marian が1851年ロンドンに出て、当時 *Westminster Review* を編集していた John Chapman と親密な関係を持つようになったいきさつを語っている。*George Eliot: A Biography* (82-90) 参照。
- 19 Cross 編集の *George Eliot's Life as Related in Her Letters and Journals* は、作家の微妙な私事を伏せる傾向があるものの、迷い多い自己を吐露する彼女の側面については率直である。
- 20 "The Natural History of German Life" (263) (1856年) *George Eliot: Selected Critical Writings* 参照。
- 21 Herts (28-9) 参照。
- 22 Willey (33) 参照。
- 23 *George Eliot and the Conflict of Interpretations* (34-5) 参照。

Works Cited

Anstey, Sandra. ed. *William Wordsworth: Selected*

- Poems*. Oxford: Oxford University Press, 1990.
- Ashton, Rosemary. *George Eliot: A Life*. London: Penguin Books, 1997.
- Beer, Gillian. *Darwin's Plots*. Cambridge, Cambridge University Press, 2000.
- Carroll, David. *George Eliot and the Conflict of Interpretations*. Cambridge: Cambridge University Press, 1992.
- Cross, J.W. *George Eliot's Life as Related in Her Letters and Journals*. New York: AMS Press, 1970.
- Davis, Michael. *George Eliot and Nineteenth-Century Psychology: Exploring the Unmapped country*. London: Ashgate, 2006.
- Eliot, George. "Natural History of German Life." *George Eliot Selected Critical Writings*. Ed. Rosemary Ashton. Oxford: Oxford University Press, 1992. 260-95.
- . "R. W. Mackay's *The Progress of the Intellect*." Rosemary Ashton. 18-36.
- . *Middlemarch*. Ed. and introd. A.S. Byatt. New York: Oxford University Press, 1999.
- Ellmann, Richard. "Dorothea's Husbands." *Modern Critical Views: George Eliot*. Ed. Harold Bloom. New York: Chelsea House, 1986. 65-80.
- Feuerbach, Ludwig. *The Essence of Christianity*. Trans. George Eliot. Prometheus Books, New York: 1989.
- Haight, Gordon. S. *George Eliot: A Biography*. Oxford: Oxford University Press, 1978.
- Hertz, Neil. "Recognizing Casaubon." *George Eliot's Pulse*. Stanford: Stanford University Press, 2003. 20-41.
- Kermode, Frank, et al., eds. *Oxford Anthology of English Literature*. Vol. II. New York: Oxford University Press, 1973.
- Miller, Hillis. "Optic and Semiotic in *Middlemarch*." Harold Bloom. 99-110.
- Shuttleworth, Sally. *George Eliot and Nineteenth-Century Science: The Make-Believe of a Beginning*. Cambridge: Cambridge University Press, 1984.
- Spinoza, Benedictus De. *Ethics and Treatise on the Correction of the Intellect*. Ed. Parkinson, G.H.R. Trans. Boyle, Andrew. London: Everyman, 1997.
- Willey, Basil. *Nineteenth Century Studies: Coleridge to Matthew Arnold*. Cambridge: Cambridge University Press, 198.